

4年 道徳 授業後の話し合いの様子

【授業者より～新琴似北小学校 樫先生】

他者の命を考えさせることをこの授業のねらいとして授業を構成した。前時は自分の命を大切にしようとした星さんの営みを追求し、本時では自分(星さん)から他者に視点を広げ、いろいろな人たちから見た星さんの帰還を考えさせようとした。だからこそ、「自分だけ助かってよかったでしょ」とか、「助かってよかったよね」という切り返し発問をした。

授業の後半では、その後の星さんについての VTR を取り上げたが、VTR の画質や音質があまりよくなかったので、もう少し精度を上げておけばよかったと感じている。GT にどのように取材し、どのように活用すればいいのかがとてもむずかしいと感じた。

課題としては、「仲間の家族の分まで・・・」という星さんの視点を持たせるためのかわりが必要だったのではないかと思う。

【参会者の意見(要約)】

・子供たちの反応のよさに驚いた。指導力の賜物である。学級に力があり、1時間の授業で子供たちは、たくさんのことを学んでいた。追求する力が付いている。

・教材化がすばらしかった。星さんへの取材、教材文の執筆、自作の挿絵(星さんの表情)の利用、飯ごうなど具体物の活用、星さんの VTR での登場など、教材化は大変であったと思うが、それにより4年生の子供たちが平和について考えることができる道徳となっていた。

・教材化という点では、自作テキストの文章を大きく変更した点がすばらしい。もともとの「1000人が全滅した島」から「必ず生きて帰る」にタイトルを変え、内容も4年生の発達段階に合わせて戦時中の食べ物に着目させた点がとてもよかった。子供が実感しやすいように教材化していた。戦争体験者の生の声はとても貴重であるが、それを子供に適する形に変えることは、平和教育という点ではとても重要である。

・4年生に太平洋戦争の題材を使うのは、難しいのではと感じたが、前時までの学習がしっかりしていたた

め、当時の様子や戦争の事実を理解した上で、本時の追求が生まれていた。

・比較を効果的に活用していた。戦争と平和、生と死、星さんと仲間、星さんと家族など、対比や類比を意図的に活用することで、子供が平和について考えるように、教師がかかわっていた。

・星さんや家族、仲間の視点で追求することはよくできていた。だからこそ、自分だったら・・・と子供に考えさせる場面があったらさらによかったと思う。

・子供は戦争を鳥の目では見えず、虫の目で見ると、大局的な見方はできず、具体を通して全体を理解していく。小学校・中学校・高校といろいろなアプローチがあるが、発達段階に応じた授業の大切さを感じられた。

・この平和事業の目的は、知識理解ではなく、情緒面の育成、心の育ちをねらいとしている。だから、道徳の時間に平和教育を行うことは、非常に適しているように思う。

・道徳の授業という点で考えると、本時の主題は「生命尊重」であった。平和教育のことばかり考えると、道徳のねらいから外れてしまうこともあるが、今日の授業は両方のねらいに合致した授業であった。

・平和教育で戦争を扱うとなると、社会科で実践という印象があるが、道徳でも十分にできるということが確認できた。また、戦争体験者の聞き取りデータから教材化できる可能性も大きいことがわかった。

・平和教育として考えると、継続的に取り組むことがとても大切である。学年が上がっても、進学しても、繰り返し学習することを通して、平和への考えや思いが培われていく。また、いろいろな教科を通して平和について考えていく場面も、繰り返し学習するという点ではとても重要で、今年度は社会科と道徳で実践できたことは大きな成果といえる。